城の崎にて　　志賀直哉

教材のねらい

1　選定の理由

主人公が事故後の療養のために訪れた山陰の城崎温泉で目にしたものから、生き物の「生」と「死」を考える作品である。作者志賀直哉の実体験をもとにしている。主人公は、事故で死にかけるような目にあいつつも、生を得た自分を意識しながら、蜂やねずみ、いもりの生死の際を目撃する。既に死骸となった蜂には主人公は静かな死を思うが、死に際のねずみの生きようとする動騒を知り、自分の投げた石で偶然にいもりを殺してしまうに従い、考えは動揺しつつも、生と死は「両極ではなかった」という考えに至りつく。

生と死は、誰もが避けて通れない問題であり、近年の自然災害や新型コロナの流行以降、生が順当に続いていくものだという考え方は激変したと言える。生徒の年齢においては、身近な体験があればもちろんだが、観念的に考える機会も多いと思われる。日常的にふと思うような事柄を、主人公が生死について最終的に獲得した境地を通じて、一つの大きなテーマとして考える機会としたい。加えて、リアリズム文学の代表とされる本教材には、自分の考えの経緯を冷徹に観察し、書きつけようとする作家の強い意志を見ることができる。それを通じて、考える、書くという行為についても考えたい。

2　指導のねらい

文章は平易ではあるが、意味や論理が必ずしも明快でない部分もある。一つ一つの文章を丁寧に読み進めることで、創造的な読み方をするというよりは、文章の意味それ自体を読み取る練習をしたい。同時に、見たことや心情を表す表現の特色を把握したい。全体の明晰さは、感情の混乱も含めて冷徹に描写する強い態度によることを理解し、近代的なリアリズム文学の一つの事例であることを確認する。

(1) 具体的な表現に即して、主人公が観察・描写したものと、それにかかわる心情を読み取る。

(2) 主人公の心情の変化とその理由を、場面の状況や置かれていた立場などとの関係で明らかにする。

(3) 主人公の死生観について理解する。

(4) 主題を効果的に展開するための構成や表現、自分を観察する際の方法、心の動揺がリアルに伝わる表現の特色について考える。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア

(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ

(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ

(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ

(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア

(6) 「読むこと」において、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア

(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ

(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ

(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ

(10) 進んで内容や展開を的確に捉えることを学び、作品の特色をつかもうとし、学習課題に沿って、自分の見たものや感じたことを効果的に表現するための構成上の工夫について考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 作品の周辺事情について必要事項を理解させる。話の展開、大枠をつかませる。 2 主人公の人物像や、情景・動植物に関連する心情を理解させる。 3	①「城の崎にて」が発表された大正時代と現代の異なっている部分を理解する。 知技 ②全体を通読し、作品全体が城崎温泉での出来事であることを理解する。 知技 ③場面分けと並行し、動植物や風景描写を見つけたら、本文中に傍線を引く。 知技・思判表	①教科書の注釈や写真などを利用しながら、明治から大正時代にかけての風俗（湯治や住居・生活の様子など）、ものの考え方（白樺派へいたる文学史など）を中心に解説する。作家史に触れてもよいが、生徒に先入観を与えないためにも、この時点で「城の崎にて」が志賀直哉の実体験を元にしていることを強調しすぎないように注意する。 ②難読文字や新出語の確認（プリントによる事前課題としておいてもよい）と合わせ、作品全体が城崎温泉での出来事であり、主人公が滞在を振り返る形で語られている、いわゆる入れ籠構造になっていることに気づかせる。 ③動植物や風景描写の描かれ方に注目させるだけでも良い。「三つの小動物の死」で文章を分けられることに学習者が自発的に気づくことを意図し、ここで「三つの小動物の死」による場面分けは指示せず、時や場所の変化による場面分け（「構成」の項目を参照）程度でとどめておきたい。
展開	1 周囲の事物の描写方法と、それらから想起した心情を読み取らせる。 2 蜂・ねずみ・いもりの三つの死が主人公の心情にいかに関連しているかを理解させる。 3 主人公の死生観の変容を読み取らせる。	①〈第一段〉（初め～一九八・7）第一節・第二節 主人公の人物像を理解する。 ②「寂しい」「静か」という言葉に注目し、それらが強調する意味の違いについて考える。 知技 ③「死に対する親しみ」について考える。 思判表 ①〈第二段〉（一九八・8～二〇〇・9）主人公が蜂の死骸をどのようにとらえたか考える。 思判表	①城崎温泉でおきる出来事や風景を観察し、内省を重ねながら生死についての感想を変容させていく人物像を読み取る。 ②傷の治癒の具合によっては致命傷になるかもしれず、城崎温泉滞在時における主人公の状態が、普段以上に他者（電車の事故、あるいは診断した医者）によって「死」を意識させられた「生」であることに気づかせる。また、秋の風景や小さな生き物、祖父や母の死骸など、「寂しい」「静か」と直接関わる風物の持つイメージにも注目させ、それらのもつ効果についても考えさせる。 ③「死に対する親しみ」から、主人公の「死」と「生」の捉え方の違いに気づかせる。主人公にとって「死」が恐怖の対象ではなく、かつ事故に遭ってから身近に感じられる事象になったことに気づかせる。 ①生きている蜂と死んだ蜂の描写の対比から「いかにも」と生（あるいは死）に対する感想を強調している主人公の語りに注目させる。蜂という具体例をもとにして、死生観に関する主人公の考えが具体的・輻輳的に語られていることに気づかせる。

展開			時限
			指導上の重点目標
②　死んだ蜂に対して感じた「親しみ」を考える。思判表 ③　蜂の死から感じたことと「范の犯罪」で考えたことが接続する効果を考える。思判表	①　〈第三段〉（二〇〇・10～二〇三・5）ねずみの一連の動作を見たときの「寂しい嫌な気持ち」について考える。思判表 ②　ねずみが「死に到達する」までの苦しみや動騒に関する恐ろしさの実感について考える。思判表 ③　ねずみの様子と比較して主人公が自分の場合をどのように回想しているか理解する。思判表	①　〈第四段〉第一節・第二節・〈第五段〉（二〇三・6～二〇六・4）桑の木の描写や、いもりに対する好悪の判断部分から作者の表現の特徴を考える。知技 ②　主人公が投げた石がどのような結果をもたらし、それについてどう考えているかを理解する。思判表 ③　「生き物の寂しさ」とは何か、そこから主人公はどのようなことを考えているかを理解する。思判表	学習活動
②　蜂の死骸を見て、第一段で「祖父や母の死骸」から連想した死のイメージを改めて想起し、「親しみ」を感じていることに気づかせる。 「死骸」＝「墓の下にいる、その静かさ」が、蜂の死と「范の犯罪」における「殺されたる妻」との二つをつなげていることを気づかせる。ここでも死生観に関する主人公の考えが輻輳的に語られていることを理解させる。	①　死に静かさを感じていた主人公が、殺されまいと全力を尽くして逃げ回っているねずみの姿を見て、死の前にある「苦しい」「恐ろしい」ものをつきつけられたと感じていることを理解させる。 ②　ねずみも人間もともに死に近い状況でなんとかして生きようともがく点で共通していると、主人公が自分の姿をねずみに重ね合わせて考えていることを読み取らせる。この段階で「学習のポイント1」に取り組んでもよい。 ③　もうじき死ぬであろう事を予感させながらも必死にあがいている動騒を恐ろしく思い、同時にその動騒が事故に遭い生きようとした自らの姿に重なることを改めて回想し、語っていることに気づかせる。	①　風景や状況をどのように描いているかや、文末表現に注目させる。この段階で「学習のポイント3」の前半部分（～抜き出してみよう。）に取り組んでもよい。 ②　石はいもりを狙うつもりもなく投げられたが、偶然に当たったいもりは死んでしまった。そこから主人公は生死が偶然によって左右されると認識したことを理解させる。 ③　主人公は、人間を含んだ動物全てに生き死にがあり、それはそれほど差のないことだと思い至った。「生き物の寂しさ」は、偶然によって生命が支配されていることからは誰もが逃れられない点から考え出されていることや、生と死が「両極のものでなかった」と考えていることを理解させる。	指導上の留意点

まとめと発展	時限
2	1
文章全体における様々な事物・心情の描写のされ方が与える効果を考えさせる。 文末表現などの文体の特徴と効果を考えさせる。	指導上の重点目標
③	②	①
読書指導を通じて作者の著作について学ぶ。思判表	文章全体の流れから、各段落相互の働きと関係を明らかにし、第一段と第五段の対応について考える。主態	場面分けの再確認をする。主 態	学習活動
③	②	①
志賀直哉の経歴や文学史上での業績に注目させる。「参考」の項に掲載された志賀直哉の日記などを利用しながら、志賀直哉の実体験と照らし合わせた読解を紹介してもよい。	全ての段落がいもりの死とその後の主人公の感慨の伏線となっていることに気づかせる。また各描写の水準でも、どの描写がどの心情に収斂しているかを確認する。その上で「三週間以上――我慢できたら五週間くらいいたいものだ」と「三週間にて、自分はここを去った」の入れ籠構造に注目しながら、主人公の死生観の変容について考える。この部分に注目してアクティブラーニングを計画してもよい。	文章全体を貫くテーマとして「死生観」があることを確認した上で、改めて導入③で行った場面分けを考え直させる。	指導上の留意点

作者

志賀直哉

明治十六（一八八三）年～昭和四十六（一九七一）年。小説家。

宮城県石巻町に、父直温（なおはる）、母銀の次男として生まれる。父は当時第一銀行石巻支店勤務。明治十三（一八八〇）年生まれの長男直行は満二年八か月で夭折しているため実質的には志賀家の長男として成育する。志賀家は近江国志賀城主から始まると伝えられているが、四代目の直之より相馬藩に仕え、祖父の直道は明治維新までは旧相馬藩の二百石の武士で二宮尊徳の弟子であった。維新後は主家相馬家の家令として財政建て直しの仕事に古河市兵衛とともにかかり、足尾銅山の開発に着手した。明治十八（一八八五）年、東京麹町区内幸町の相馬家旧藩邸の祖父母のもとに移され、実質的には祖父母の手で育てられる。二十二（一八八九）年、学習院初等科入学。二十八（一八九五）年に、母銀死去（その後父は高橋浩と再婚する）。九月、学習院中等科に進む。十八歳頃より内村鑑三の教会に通い、足尾銅山鉱毒地視察を計画するが、父と意見衝突。学習院では二年落第し武者小路実篤らと同級になる。学習院高等科を経て東京帝国大学英文科に進むが後に国文科に転じる、その後中退。大学を中退した明治四十三（一九一〇）年、志賀直哉・武者小路実篤・木下利玄・正親町公和（おおぎまちきんかず）の回覧雑誌「望野」（はじめ「暴矢」、改題して「望野」となる）、里見弴・児島喜久雄・園池公致・田中雨村らの回覧雑誌「麦」、柳宗悦・郡虎彦の回覧雑誌「桃園」の三誌が合併して四月に「白樺」が誕生する。「白樺」は文学雑誌であると同時に美術雑誌でもあり、また、大正文学の出発点となる雑誌であった。初期の作品には「剃刀」「老人」「正義派」「清兵衛と瓢箪」などの客観小説の流れと、自己と肉親や友人をモデルに用いた私小説の流れとが入り混じって展開する。

大正元（一九一二）年九月、「中央公論」に「大津順吉」を発表し最初の原稿料を得た。この年、父との対立がもとで広島県尾道に一時居住。翌二（一九一三）年八月十五日夜、山の手線の電車に跳ね飛ばされて負傷する。十月、後養生のため城崎温泉へ（この年「范の犯罪」などを書き、三年ほど創作を中止する）。三（一九一四）年、父の反対を押し切って武者小路実篤の従妹勘解由（かでの）小路康子（こうじまだこ）と結婚、京都や赤城などにしばらく住む。その後千葉県我孫子の手賀沼のほとりに移住。当時の我孫子には柳宗悦、武者小路、バーナード・リーチや中勘助なども住み、「白樺村」的な雰囲気があった。志賀直哉は生涯に転居二十数回。居住した場所に材を取った名作を発表している。

「城の崎にて」が発表された六（一九一七）年は、三年ほど中止していた創作を再開した年である。また、この年、長年にわたった父との争いが解決している。父との和解の喜びを一挙に書ききった「和解」他、「好人物の夫婦」「赤西蠣太」などを発表し、大正期の代表的な作家となった。広津和郎の「志賀直哉論」もこの時期に書かれており、見るべきものを正確に見抜く肉眼の作家

というイメージが定着した時代でもあった。

その後も短編を幾つも発表するが、十（一九二一）年、長編小説「暗夜行路」が「改造」に連載され始める。この年祖母死去。また「暗夜行路」は前編こそひとまず完結したが、後編はすこぶる難渋し幾度もの断絶を繰り返した。そして昭和十二（一九三七）年四月についに完結。小林秀雄・河上徹太郎・谷川徹三らより賛辞が寄せられた。近代文学史上不朽の名作と謳われる。その間に我孫子から京都、山科を経て奈良へ転居。「雨蛙」「山科の記憶」などの短編を発表した。昭和十六（一九四一）年芸術院会員。第二次世界大戦後は「灰色の月」「山鳩」「朝顔」など簡潔にして奥行きの深い短編を発表した。二十四（一九四九）年文化勲章受賞。熱海から東京渋谷に居を移し、悠然とした晩年を送る。四十六（一九七一）年十月二十一日、関東中央病院にて肺炎のため死去。八十八歳であった。

生前の志賀直哉の周辺には滝井孝作・尾崎一雄・網野菊・直井潔・島村利正・藤枝静男・阿川弘之らが集まり「志賀山脈」を形成したが、その私小説性や伊藤整の言う調和的な「人格美学」的有り様に対して、太宰治・織田作之助らの反発もあった。

文学活動

主な作品を以下に挙げる。

初期短編――「剃刀」「正義派」「清兵衛と瓢箪」「網走まで」など
中期短編――「好人物の夫婦」「赤西蠣太」「小僧の神様」「万暦赤絵」「和解」など
戦後短編――「灰色の月」「朝顔」
長編――「暗夜行路」

作者を解くカギ

1　白樺派

志賀直哉は学習院中等科で二回落第しているが、この落第によって、木下利玄・正親町公和と同級になり、隣のクラスだった武者小路実篤と親しむ機会を得た。そして特に武者小路実篤とは生涯を通じて深いかかわりを持った（志賀直哉の妻は武者小路の従妹にあたり、結婚式は武者小路宅で行われている。また、志賀直哉の葬儀に当たっては武者小路が体の不自由を押して参列し、里見弴一人が弔辞を読む予定だったところ、武者小路の弔辞がその場で加わった）。「志賀直哉が学習院に入学しなければ、また二年落第して中等科六年、十九歳のとき十七歳の武者小路実篤と知り合わなければ、「白樺」は存在しなかった。武者小路実篤は志賀直哉と会わなくとも小説家、実践家となっただろうが、志賀直哉は武者小路実篤との出会いがなければ作家にはならなかった可能性が高い。」（「白樺たちの大正」関川夏央）。志賀直哉は武者小路実篤と出会う以前にも有島生馬らと倹遊会を結成し「倹遊会雑誌」という原稿を綴じ合わせた雑誌を回覧していたが、雑誌「白樺」の創刊に加わったこと、また白樺によった作家・画家・彫刻家・美術研究家・詩人など多くの人と交流したことによって、作家、志賀直哉が生み出されていったと考えられる。

2　父との不和

明治期における国内での大きな社会問題となった渡良瀬川の鉱毒事件の被害地視察に行こうとした志賀直哉は、父親に厳しく反対される（足尾銅山は祖父の直道がその開発に関係していた）。その後、尾道に居を移すきっかけとなったのも父親との対立であり、

また結婚に際しても父親の反対にあい、それを押し切る形で康子と結婚した（康子は先に川口家に嫁していて夫と死別。志賀直哉とは再婚になる。結婚式は媒酌人なし、武者小路夫妻と勘解由小路夫妻が列席しただけであった）。この結婚をきっかけにして父との不和はさらに悪化する。この対立は志賀直哉三十四歳の年に和解が成立するまで続いた。青年時代より次女の出生（長女は夭折）までの長期間にわたって続いたことになる。この対立と和解は小説「和解」として作品化される。志賀直哉は父親との対立だけではなく、肉親や友人とのかかわりや自己をモデルにした多くの作品を残している。自己の周辺を描く私小説的作品は志賀直哉の作品群の中に一つの流れを形成している。その象徴となるのが父親との不和であったのである。

出典

本文は『小僧の神様　他十篇』（岩波書店　平成十四）によった。初出は雑誌「白樺」大正六（一九一七）年五月号に掲載された。作者三十四歳の時である。翌（一九一八）年一月、新潮社刊「夜の光」に収録されるに際して「大正六年四月」と執筆年月が明示される。「夜の光」に収めたときに本文にかなり大きい修訂がなされ、その後、九巻本全集に収めたときにも本文の改訂がなされている。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「范の犯罪」→『范の犯罪』（教科書一九九・16）〔教育上の配慮〕

○「支那人」→「中国人」（教科書一九九・16）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊**教師用**

○志賀直哉を知るために

「志賀直哉」上下　本多秋五　岩波書店　平二

「志賀直哉」新装版　福田清人・栗林秀雄　清水書院　平二十八

＊一九六八年版の再版

「志賀直哉　芸術小説を書き続けた文豪」宮越勉　おうふう　平三十

○大正時代の雰囲気をつかむために

「大正文学アルバム」（新潮日本文学アルバム　別巻2）　新潮社　昭六十一

「日本文壇史19　白樺派の若人たち」瀬沼茂樹　講談社　平九

「白樺たちの大正」関川夏央　文藝春秋　平十五

○「城の崎にて」読解参考のために

「志賀直哉の短編小説を読み直す」（読み直し文学講座4）島村輝　かもがわ出版　令三

＊桑の木の場面とそれに続くいもりの場面を「黄泉の世界」として読解した一例。

「講義日本文学　「共同性」からの視界」
東京大学文学部国文学研究室　東京大学出版会　令三

＊生徒用

「近代日本文学のすすめ」　大岡信・加賀乙彦・菅野昭正・曾根博義・十川信介　岩波書店　平十一
＊近代日本の小説に対しての評論アンソロジー。志賀直哉は「暗夜行路」が取り上げられている。

「志賀直哉」（ちくま日本文学 021）志賀直哉　筑摩書房　平二十

「志賀直哉はなぜ名文か」　山口翼　祥伝社　平十八

「温泉文学論」　川村湊　新潮社　平十九

「志賀直哉、映画に行く　エジソンから小津安二郎まで見た男」
貴田庄　朝日新聞出版　平二十七

「日本近代随筆選３　思い出の扉」
千葉俊二・長谷川郁夫・宗像和重　岩波書店　平二十八

主題

蜂・ねずみ・いもりの死を目撃した主人公が生と死について考える物語

電車に跳ねられたが危うく助かった主人公は、後養生に行った城崎温泉で、蜂・ねずみ・いもりの死を目撃する。そして蜂の死から死に対する静かさ・親しみを、ねずみの動騒から静寂の前の恐怖を感じつつも「あるがまま」で生きようと思い、また、いもりの偶然の死では自分も含めて生き物の持つ寂しさを実感し、生と死とは両極端ではなく、それほど差のないものだという感慨を抱え込むことになっていった。

構成

構成 1

段落	ページ・行	段意
第一段	**第一節** 初め～ P一九六・5〈いたいものだと考えて来た。〉 **第二節** P一九六・6〈頭はまだ何だか〉～ P一九八・7〈親しみが起こっていた。〉	**第一節**　山の手線の電車に跳ねられたけがの後養生に、自分は一人で但馬の城崎温泉へ来た。 **第二節**　話し相手もない日々の中で、遠い先のことにしていた「死」を身近なものとして感じた。けがから助かったことをきっかけにして奮起したかったのだが、心は静まってしまい、「死」に対して親しむ心境になった。
第二段	P一九八・8〈自分の部屋は二階で、〉～ P二〇〇・9〈気持ちだったので弱った。〉	ある朝、自分は一匹の蜂が縁のわきの屋根で死んでいるのを見つけた。一つ所に全く動かずにいる死骸は、いかにも死んだものに感じられ、静かな感じを与えた。自分は寂しかった。しかしそれは静かだった。自分はその静かさに親しみを感じ、その静かさから過去に書いた小説のことも思った。
第三段	P二〇〇・10〈蜂の死骸が流され、〉～ P二〇三・5〈それはしかたのないことだ。〉	それから間もないころ、自分は、首に魚串を刺されて川でもがく一匹のねずみを見た。寂しい嫌な気持ちになる一方、死の静寂の前には恐ろしい動騒や苦しみがあることにも気づかされた。自分の場合を考えてみると、ねずみに近いものがあったが、不思議に死の恐怖はほとんど感じなかった。「あるがまま」で静かに死のうと、もがき苦しんで死のうと、どちらでもよい。それほど差はないことだと、自分は感じるのだった。
第四段	**第一節** P二〇三・6〈そんなことがあって〉～ P二〇三・16〈もっと知っていたと思った。〉 **第二節** P二〇四・1〈だんだんと薄暗く〉～ P二〇六・2〈自分を誘っていった。〉	**第一節**　それからしばらくしたある夕方、一本の桑の木を見た。物静かな雰囲気の中、一枚の葉だけが動く不思議な様子をしばらく見ていたが、風が吹いて葉は動きを止めた。 **第二節**　その後、薄暗くなった頃、脇の流れにいもりを見つけた。いもりを驚かそうとして自分の投げた石が、偶然にそのいもりを殺してしまった。自分は偶然に支配される生き物の寂しさを感じた。自分は、蜂やねずみのことを考えた。生きていることに感謝しなければならないような気もした。しかし生きていることと死んでいることに、それほど差はないようにも感じるのだった。
第五段	P二〇六・3〈三週間いて、〉～ 終わり	三週間いて自分はここを去った。もう三年になるが脊椎カリエスになるのだけは助かった。

構成2

城崎温泉の三週間の滞在を終えてから三年以上経った、「語り」の現在時

城崎温泉滞在を振り返る

けがの後養生で、一人で来た 考えるのはけがのこと・祖父や母の死骸 生きた蜂→いかにも生きている 死んだ蜂→いかにも死んだもの 殺されたる范の妻の静かさを描きたい	死ぬ前の動騒を繰り広げるねずみ ＝ああいう苦しみがあるのは恐ろしい ねずみの様子を自分のけがの記憶にあてはめて考える	いもりが死に至る様子を見て 脊椎カリエスになるだけは助かった
寂しい ＝死そのものへの素朴な感情 いかにも寂しい ＝死を生と比較しての感情	死に到達する前の動騒が恐ろしい ＝寂しい嫌な気持ち 動騒するのが本当 →しかたのないこと	偶然に生きた自分 →喜びの感じはない
死生観 寂しい・静かが両立 （生死は両極、 かつ同居）	死生観 寂しい面が強まる （生死は両極、 かつ分裂）	死生観 生死の差は ほとんどない
静かないい気持ち ＝「何らか」の死への親しみ いかにも静か ＝死への親しみ 死への親しみを言語化したくなる	死への親しみはある 死そのものには恐怖しない	偶然に死んだいもり

板書例

1　城崎温泉に着く前

・電車に跳ね飛ばされてけが
↓後養生に一人で城崎温泉へ

・脊椎カリエス＝致命傷
①二・三年で出なければ後は心配いらない。
↑もう三年以上になる（P二〇六）
②三週間以上―我慢できたら五週間くらいいたい
↑三週間いて、自分はここを去った。（P二〇六）
☆語り手が振り返って語っている構造（＝入れ籠型構造）となっている

⇦

読解のカギ
なぜ三週間で去ったのか？
何を我慢できなくなったのか？

2　城崎温泉に着いて

主人公の様子
・頭はまだ何だかはっきりしない
物忘れが激しくなる
⇔しかし（同時に）
気分は近年になく静まる
落ち着いたいい気持ち
↓頭（身体）は不調だが、気分（精神）は好調。

・よくけがのことを考えた。
沈んだこと・寂しい考え
⇔しかし（同時に）
静かないい気持ちがある。
一つ間違えば死骸になっていた。
青い・冷たい
祖父や母の死骸とも何の交渉もない
↓それは寂しいが、恐怖させない。

⇦

死を身近に感じ始める。
ロードクライブのような使命感を感じたかったが、心は静まってしまった（使命感との距離感）。
「何かしら」（＝言葉にできない）死に対する親しみを覚える。

⇦

主人公は死を「寂しい」ものだが同時に「静かな」もの（＝いい気持ちのもの）ととらえ、「何かしら」の親しみを覚えている。

3　蜂を見て

・蜂を見ての直接の感想
生きている蜂＝いかにも生きているもの
忙しくはい回る
拘泥する様子はない
死んだ蜂＝全く動かずに転がっている
↓いかにも死んだもの
いかにも静かな感じ
主人公の感想が強調されている

⇦主人公は生きている蜂の姿と死んだ蜂の死骸とを比較（「せわしくせわしく……静かである。」（P 一九九・14）して、死んだ蜂に「全く動かず」「静かな感じ」を覚え、「その静かさに親しみを感じ」ている。

・蜂を見て連想したこと
「「殺されたる范の妻」を書こうと思った。」
＝
「しまいに殺されて墓の下にいる、その静かさを書きたいと思った。」

⇦主人公は蜂の死骸を見て感じた「静かさ」への「親しみ」を繰り返しながら、「何らか」ではなく「書きたい」と具体化させている。

4　ねずみを見て

・ねずみを見ての直接の感想
ねずみ＝必死に逃げ回る（＝「動作の表情」）
↓「自分は寂しい嫌な気持ちになった。」

※ここでは同時に「静かないい気持ち」にはならない。

⇦主人公は死ぬ前の動騒をくりひろげるのを見て、死を「寂しいが、同時に静かないい気持ちのもの」から「寂しい嫌な苦しみと、その後の静かさ」というように考え直している。

・ねずみを見て連想したこと
自分がけがをしたときのことを連想

←両方（「気分で願う」＝静かな死と、「実際」＝死ぬ前のねずみのような動騒）が本当。

⇦終始静かな死を迎えようと、終始ねずみのように騒ごうと、「どちらでもよ」く、「それはしかたのないこと」と考える。

5 **桑の木の葉を見て**

・「角を一つ一つ先へ……そわそわとさせた」で、秋の雰囲気が強調される。

「いつまで行っても、先の角はあった」

5 と 6 は時間・場所が連続した場面

6 **いもりを見て**

・いもりを見ての直接の感想

いもりを驚かせようと石を投げる。

偶然石が当たり、偶然いもりは死んでしまう。

⇦ 主人公はいもりが死んでいく過程を見て「かわいそうに思うと同時に、生きものの寂しさ（＝生死が偶然で左右されること）をいっしょに感じた。」

・いもりを見て連想したこと

寂しい気持ちで温泉宿へ帰る

蜂：土の下に死骸が行く？

ねずみ：海岸に死骸が行く？

偶然の差

自分：今歩いている

⇦ 主人公はいもりが死んでいく過程を見て、生と死のつながり、連続性（偶然の差）を意識した。

7 **城崎温泉から帰って**

「三週間いて、自分はここを去った」

→なぜ三週間で切り上げた？

答　我慢できなくなったから。

→何に我慢できなくなった？

まとめとして

①この作品のテーマは何？

答　死と生は偶然の差でしかないという死生観。

②1～7の意味段落を、作品のテーマを意識してまとめるとしたらどうまとめられる？

答　第1段：1・2
第2段：3
第3段：4
第4段：5・6
第5段：7

③主人公は何に我慢できなくなったのだろう？

答　自分が死と向き合う場であるという重さに我慢できなくなった。

発問例

・「導入の問い」のねらい

小さな生き物の姿や動きを、意識して観察してみたことがありますか。

（ねらい）かわいい生き物なら、ふれあいに感情が高まったり、嫌悪感のあるものなら目を背けたりする体験は多いだろう。本作品は、目に見えるものをじっと観察し、そこから生じる自らの気分や考えのうつろいも克明に書き記そうとする。それはありふれたようでも、特別な行為であることを、作品を通じて感じたい。

●一九六ページ

問 **小説の前提となる時・場所・主人公の状況についてまとめてみよう。**

答 時＝稲の穫り入れの始まる頃（秋）。
場所＝城崎温泉。散歩するのにいい場所がある。
状況＝けがの後養生のために城崎に来た。
一人である。
頭がはっきりしない。
物忘れが激しくなった。

問 **主人公の日常はどのようであったか。**

答 話し相手がいない。
読むか書くか。
ぼんやりと風景を見ている。
散歩をする。

●一九七ページ

問 **「やはり」（5行目）は、どのようなことを受けているか。**

答 「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という周囲の風景が持つ寂しい雰囲気。

問 **「寂しい考え」（5行目）とは、どのような考えか。**

答 一つ間違えば、祖父や母の死骸が脇にある墓の中で、青い冷たい顔をして寝ていただろう、という考え。

問 **「しかしそれには静かないい気持ちがある」（6行目）の「しかし」は、どのような働きをしているか、「寂しさ」（寂しい考え）と「静かさ」とを対比して説明しなさい。**

答 「しかし」は「寂しさ」と「静かさ」を対比させる接続詞で、「寂しさ」には親しみ（「いい気持ち」）を感じないが、「静かさ」には親しみを感じていることがわかる。

問 **◎「それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった」（15行目）のは、なぜか。**

答 身近な人からの想像でもあり、死は誰にでも到来する静かな境地であり、騒ぎたてるようなことではなかったから。

●一九八ページ

問 **「いつかはそうなる。」（1行目）とはどういうことか。**

答 死んで、墓の下で祖父や母の死骸を脇にしながらお互い何の交渉もなく横たわること。

問 **「いつか知れない」（2行目）とあるが、この「いつか」は「それがいつか？」（1行目）の「いつか」とどう違うか、説明しなさい。**

答 2行目の「いつか」は極めて切実で切迫感が強いのに対し、1行目の「いつか」は遠い漠然とした時期を指し、切実さ、切迫感に欠けている。

問 **「そういうふうに」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 本当は死ぬはずだったが、自分にはしなければならぬ仕事があるから、何かが自分を殺さなかった、ということ。

補 「クライブのように」ということだが、主人公の立場に置きかえて考えてみると、電車の事故で重傷を負って死んでしまったかもしれないのに、自分は辛くも死を逃れて生きている。生きているということに何がしかの意味があるのだということになる。「（クライブが）激励される」（5行目）ように自分も、助かっ

た命に意味を感じたいということになる。

問 **◉「感じたかった」（6行目）と過去形で表現されているところに、どのような思いが表れているか。**

答 生き残ったことに自分だけの人生の意義があると考えたが、一方で、そこから微妙に離れている思い。

●一九九ページ

問 **「いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。」（6行目）に述べられている「静かさ」と「寂しさ」が指す内容上の相違点を説明しなさい。**

答 「静かさ」は死そのもののイメージ、「寂しさ」は【死骸】を【生きているもの】と比較したときに抱いた感情を指す。

補 「静かさ」は死そのものがもつ普遍的、絶対的な永遠性を想起したときに生じる穏やかな心情を指す。それに対して「寂しさ」は【死骸】と【生きているもの】の物質的な対比から感じる生から死への変遷、ひいては自己消失に対する落ち着かない心情を指す。

この問より先に、一九九ページ12行目での「死んだ蜂」の捉え方についての発問を考えると、この問もわかりやすくなる。

問 **「そこ」（10行目）とは、どこを指しているか。本文中から抜き出しなさい。**

答 玄関の屋根

問 **「外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは」（12行目）という表現から、「死んだ蜂」をどのような存在として捉えていることがうかがわれるか。**

答 自らは動くことのない不動・不変の静かな存在。

問 **「その静かさに親しみを感じた。」（15行目）とあるが、この親しみは何に対する親しみか。**

答 「死」の静かさ。

補 第一段の終末の「何かしら死に対する親しみ」（一九八・7）と対応させて考える。

問 **◉「いかにも」という語の多用には、どのような効果があるか。**

答 蜂の生死について、作者の感じ方をそれ以外のことはないという程度まで強調している。生と死を際立たせ、また、一種のリズム感を生じさせている。

補 ただし、「いかにも」とは、まさにそのようだということである。前後の説明は簡潔で、詳細に説明しないことでかえって、読者ごとに異なる想像を許容しながら、主人公との感慨の共有を促す表現だと言える。

●二〇〇ページ

問 **「それを助長し」（2行目）が指す言葉を本文中から探しなさい。**

答 嫉妬。

問 **「「殺されたる范の妻」を書こうと思った」（5行目）とあるが、ここで自分が思った気持ちはどのような気持ちか説明しなさい。**

答 范に殺されて墓の下にいる范の妻の死骸から想起される「静か」な気持ち。

補 「青山の土の下」にある祖父や母の死骸との重なり合いも併せて教授したい。

問 **「自分は『范の犯罪』という」（一九九・16）～「気持だったので弱った。」（二〇〇・9）という文章が蜂の文章の後に描かれることに主人公のどのような変化を見て取れるか。**

答 死骸から死のイメージを想起する主人公が、単に静かさに親しみを感じているだけの状態から一歩踏み込み、その親しみを積極的に表現したいと考えるようになったことが読み取れる。

●二〇一ページ

問 **◉「動作の表情」（7行目）とは、どのようなことか。**

答 動作が、感情をよく表す顔のように、内部の心情を表していること。

補 直前に「顔の表情」とあるのと対照されている。

問 **「あひる」（11 行目）の描写は、ここでは、どのような効果を生んでいるか。**

答 「あひる」が頓狂であればあるほど、それと対照的に死が迫ったねずみの悲劇的運命を強調される効果。

補 ねずみの動騒は偶然近くにいても「あひる」にとっては他者の動騒でしかなく、したがって「死」は他者とは共有できないその個体特有のものである。この「あひる」の存在が全体の息苦しさを救っていることにも注意したい。

問 **◉「寂しい嫌な気持ちになった」（15 行目）のは、なぜか。前の部分の「寂しい」気持ち（一九七・5、15）と対比して考えてみよう。**

答 自分も、ねずみのように必死でもがくかもしれないという考えに、平静だった心を乱されているから。死を考えても親しみを感じるなど落ち着いていた前の部分の心情が、鼠の死に際を見たことで覆っている。

問 **「あれが本当なのだと思った。」（15 行目）の「あれ」は何を指しているか。**

答 死ぬに決まった運命を担いながらもねずみが殺されまいと、全力を尽くして逃げ回っている様子。

●二〇二ページ

問 **「それに近い自分」（4 行目）とはどのような自分のことか。**

答 ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

問 **「しかし」（13 行目）は、どのような内容を受けているか。**

答 「死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であった。」（二〇二・10）を受ける。

補 潜在的には死の恐怖があったと考えられる。そうした潜在的恐怖心に対する「しかし」であろう。

●二〇三ページ

問 **「あるがまま」（3 行目）と「　」をつけてある理由と、この部分の意味について考えなさい。**

答 「　」を用いたのは強調。これが生きるにあたっての原理だと強く意識している。意味は、あるとおりに、そのままということ。「あまり変わらない自分であろう」と考えれば、生き延びるために「ありのまま」の動騒を繰り広げるだろうという意味。

補 「あまり変わらない自分であろう」の部分は、「であろう」（＝だろう）という言葉遣いに注意しながら、「ねずみの場合と、そう変わらないのだったに相違ない」（1 行目）との対応関係から指導する。

問 **◉「両方」（4 行目）とは、何と何を指しているか。**

答 「気分で願うところ」と「実際」。

補 「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。

つまり、「気分で願うところ」は静寂な死のあり方、「実際」は、死に切るまで生きる努力を続けること。

補 ただし、「気分で願うところ」ついては、運命の違いによりもたらされる意識など、若干読解の余地が残る。

●二〇四ページ

問 **「いもり」（3 行目）の登場場面までの風景描写がこの作品全体の構成の上で果たしている役割について考えてみよう。**

答 次に続くいもりの死への、前奏としての役割を果たし、秋の夕暮れの冷ややかで物静かな感じを作り上げている。

補 「黄泉の国」のイメージを読み取る説と、あくまでも実際の景色の描写であるとする説の 2 通りの研究論文がある（「語句の研究」や「キ

ー・ポイント「桑の木の場面について」参照）。

●二〇五ページ

問 **⊙「生き物の寂しさ」（8行目）とは、どのようなことか。**

答 生死が偶然によって左右されていること。

補 主人公がいもりを殺す意図を持っていなかったことからすると、いもりの死は偶然であったと言える。

問 **「いもりは偶然に死んだ。」（9行目）とあるが、いもりの死が偶然であったことはどのように描かれているか。適当な部分を二〇四～二〇五ページから順に抜き出しなさい。**

答 ・いもりを驚かして水へ入れようと思った。
・別にいもりを狙わなかった。
・それが当たることなどは全く考えなかった。

問 **「しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。」（14行目）のはなぜか。**

答 蜂・ねずみ・いもりの死から、自身のことに思いをはせるときに、その生がひどく単純で不確かな要因に支配されていることに気づき「寂しい」気持ちが起こってしまったから。

問 **「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。」（15行目）のはなぜか。**

答 偶然が生き物の生死を支配すると実感したとき、今まで抱いていた生と死とは正反対のもの、両極端なものという思いが否定され、生死の境界は極めて不確実なもの、あいまいなものと思うようになったから。

●二〇六ページ

問 **「そういう気分」（2行目）とは、どのようなことか。**

答 「生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。それほどに差はないような気がした。」（二〇五・16）こと。

補 偶然ながらも生きて歩いていることに「感謝しなければ済まぬような気」がするが、「実際喜びの感じは湧き上がっては」こない。生きることへの確実な実感を持てなくなった主人公の衝撃を、感覚と思念の両面から表現している部分である。

問 **⊙「三週間いて」（3行目）とは、どのような心情を表しているか。**

答 冒頭に「我慢できたら五週間くらい」と書いてあるので、我慢しきれなかったことがわかる。城の崎が、自分が死と向き合う場である、ということの重さに耐えきれなくなったと考えられる。

問 **⊙「もう三年以上になる」（3行目）という時間の経過の記述は、どのような効果を付け加えているか。**

答 脊椎カリエスの危険性も脱したものの、生き延びてほっとしたというよりは、怪我当時の死生観が持続していることを表している。

●まとめ

問 **「蜂」「ねずみ」「いもり」について、それぞれの描写の特徴を説明しなさい。**

答 蜂＝忙しく立ち働く蜂と、死んで動かない蜂が鮮明に描かれており、生死の対照が印象的に焼きつけられる。ねずみ＝必死にもがくねずみの動騒の恐ろしさが描かれ、あひるののんきな描写を挟んで鮮明な印象を与える。いもり＝死んでいく過程が短文で明確に描かれており、偶然に支配されてはかなくも死んでしまう生き物のあり方が不気味なまでに述べられている。

問 **この作品の主題を、三つの小動物の死に言及して一三〇字程度でまとめなさい。**

答 蜂の死から、死に対して静かさ、親しみを感じ、ねずみの動騒から、静寂の前の恐怖を感じつつも、「あるがまま」に生きようと思い、いもりの死から、偶然に支配される生き物の寂しさを共感し、生と死は両極ではなく、それほどに差はない、という心境になっていく。（一二二字）

語句の研究

●一九六ページ

1山手線　跳ね飛ばされたときの様子などは「参考」欄にも揚げた日記などを参照のこと。「城の崎にて」初出当初の山手線は中野～新宿～東京～品川～池袋～田端～上野と、「の」の字の経路をたどっていた。現在のような環状運転を行えるようになったのは大正十四（一九二五）年の上野～神田間の線路が完成したことによる。一九六ページの一両編成の写真とあわせて、当時の風俗と現在の風俗の違いを紹介する一助になる。

1城崎温泉　池内輝雄は志賀直哉の友人である長与善郎の父、長与専斎が城崎温泉に縁のある人物であった事を手がかりに、『但馬城崎温泉案内記』という小冊子を参照しながら、「傷の治療はもとより胸部、脊髄などの病の療養に適するという城崎温泉の効能は、その意味で、まさに「後養生」にもってこい」「知人などに会うことのない東京からはるか離れたところで、しばらく静かに過ごすことが企図されたのかもしれない」と考察している（「「城の崎にて」論」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ、文学研究と国語教育研究の交差　小説編　2』）。湯治が一般的な療治方法の一つとして見なされていた時代の小説であることを生徒に伝えておきたい。

2脊椎カリエス　かつて「亡国病」とまで恐れられた結核菌が脊椎に回った病気。結核といえば樋口一葉なども命を落とした肺結核を連想しがちだが、リンパ節や骨、腎臓、腸などあらゆる場所での結核菌感染が起こりえる。現在では化学療法の発達により病臥期間が大幅に短縮された病気ではあるが、それでもなお髄膜（脳を包む膜）に結核菌が付着し髄膜炎になるなど、全く縁のなくなった病気というわけではない。

3二、三年で出なければ後は心配はいらない　「それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」（二〇六・3）と対応する。医者（他者）に言われた命の心配から脱したことに対して、「三年以上」経ってから「だけは助かった」と限定的な語り方をしていることに注目させたい。

3要心は肝心　注意することが大切。「要心」は「用心」、「肝心」は「肝腎」とも書く。「肝心」は大切、重要の意味に用いる。

4～5三週間以上……我慢できたら五週間くらいいたいものだ　「三週間いて、自分はここを去った」（二〇六・3）と対応する。この対応関係から、主人公は城崎温泉滞在中に何らかの原因があって我慢しきれなくなったと読み取れる。学習者の興味をひくため、最初にこの対応関係を指摘しておいてから本文の通読を始めることも考えられる。

8しかし気分は近年になく静まって　志賀直哉の実生活と重ねれば、結婚問題、作家志望、出版費用の依頼などで、作者と父との衝突・不和、尾道での借家生活の不安定が「近年」の生活として考えられる。また、【頭（身体）＝はっきりしない】／【気分＝静まって、落ち着いたい気持ち】の二項対立を指摘することで、後の【寂しい】／【静か】に注目するきっかけを作ることもできる。

11一人きりで誰も話し相手はない。　「城の崎にて」の草稿「いのち」には城崎温泉での生活が次のように書かれている。「…自分は温泉に来た。自分は精出して入浴した。それから読む事、書く事、散歩する事をし

た。然し書く事と入浴とは一致しなかつた。入浴を精出せば絶えずからだも気分もゆるんだ。」なお、この時期に書いていたのは「暗夜行路」前編の草稿（→二〇〇・脚注14）である。

●一九七ページ

4〜5小さい清い流れ　「やまめ」が「たくさん集まっている」ことから、この「流れ」の清さは国土交通省や環境省が制定した「水質階級Ⅰ」に相当すると考えられる（→「参考」資料①）。また「足に毛の生えた大きな川がに」は記述された外見および生息域から、モクズガニを指すと思われる。城崎温泉は海に近いゆえに遡上してきたのであろう。いずれにせよ小さな生き物から周囲の自然や雰囲気を想像する一つの手がかりになる表現である。

5やはり沈んだことが多かった。　「やはり」は、前の「冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡」という、周囲の風景の持つ情調（寂しさ）を受けて使われている。「沈んだこと」とは、すぐ後の「寂しい考え」すなわち「けが」「祖父や母の死骸と何の交渉もなく寝ている自分の死骸」についての考えである。

8一つ間違えば　「一つ」は副詞で、ちょっと、ほんのわずかという意味。

16いつかはそうなる。それがいつか？　「いつか」は漠然とした、それほど切迫感のない心情である。次の文の「知らず知らず遠い先のことにしていた。」（一九八・1）という程度の「いつか」である。

●一九八ページ

3自分は死ぬはずだったのを……仕事があるのだ　長嶋和彦は、実際に志賀直哉が中学時代に読んだであろうロード・クライブの伝記を特定した上で、以下のように指摘している。「『城の崎にて』に書かれている「自分は死ぬはずだったのを助かった」というのは、クライブが二度ピストル自殺を図ったけれども、弾丸が確かに装塡されていたにもかかわらず、なぜか二度とも弾丸は発射せず、一命を取り止めたことを言っているのである。」（「クライブ卿興信録―『城の崎にて』の「ロード・クライブ」について―」）また、この部分は「そう思うことによって」の「そう」に相当する部分である。

6しかし妙に　クライブのような一種の使命感、奮い立つような人生の意義を感じたかったが、実際はそれと反対に気持ちが静まってしまったという不思議さを「しかし妙に」と表現している。そして、次の文章にあるように「生」よりも「死」に心が傾いてゆくことになる。

キー・ポイント　「寂しさ」と「静かさ」　「寂しい」という言葉が、「寂しい秋の山峡」（一九七・4）（風景）のような周囲の情景に対してと、「寂しい考えだった。」（一九七・5）（自分の死についての考え）のような「死」そのものに関する感情との二つのものに対して用いられている点に留意したい。周囲の風景の持つ情調を受けて用いられている。さらに、「しかしそれには静かないい気持ちがある。」（一九七・6）の「それ」は直前の「寂しい考え」を指している。この「寂しさ」と「静かさ」とが「しかし」ではさまれていることにも注意する。「自分」（主人公）は、「寂しさ」には直接親しみを感じず、「静かさ」に親しみ（いい気持ち）を感じている。つまり、「寂しさ」の中に「静かさ」を感じ、そこに強い関心を示してゆくのである。また、表現上の違いを考える場合は「寂しさ」は主観的表現であり、「静かさ」のほうは客観的表現と考えることができる。「寂しさ」と「静かさ」が異

質のものであることを押さえさせたい。

7 何かしら死に対する親しみ　けがをきっかけに死を改めて身近に感じるようになったことで起こった「親しみ」だが、ここではまだ漠然とした、そこはかとない感覚で、祖父や母の「死骸」を想像することから生じた実感的な感慨であることが印象づけられる。また、「城の崎にて」は「三年以上」経った時点から城崎温泉滞在を振り返る形式の小説であることを重視すれば、三つの小動物の死を見る前のこの時点では、まだ「死に対する親しみ」を明確に言語化して語れないのだとも読み取れる。

15 欄干　ここでは、旅館の二階の部屋にある縁側の手すり。

16 死んでいるのを見つけた。　主人公は生きている蜂を「眺めていた」のに対して、死んでいる蜂は「見つけ」ている。生に対しては受動的な視線でとらえているが、死に対しては能動的な視線でとらえていると考えることもできるし、また、【P一九七での簡単に見つかる「やまめ」】／【「なおよく見る」と見つかる「川がに」】という対比に落とし込むことや、「祖父や母の死骸」から死のイメージを想起することを繰り返していると理解することもできよう。いずれにせよ蜂の死骸を「見つける」ことで、死そのものの永続性・普遍性に親しみを覚えるようになっていくことは押さえておきたい。

●一九九ページ

2 拘泥する様子はなかった。　擬人法でハチの行動を表現している。前文「冷淡だった。」と同様、主人公の心情が強く反映される表現技法である。

6 いかにも死んだものという感じ　蜂は既に「死んだもの」であり、したがって、この場合、死は完了した形で存在する。その点が、後のねずみやいもりとは違っている。

12 外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは　雨が降るか、風が吹くかして初めて蜂の死骸は移動する。死んだ蜂自体は自分では動かず、他のものに影響も与えもしない。この没交渉という点で「青山の土の下」にいる「祖父や母の死骸」（ないしは想像上の自分の死骸）と蜂の死骸を並べて考えることも可能であろう。

14 それにしろ、それはいかにも静かであった。　「それにしろ」の「それ」は死骸がありに引かれていくことを指す。「しろ」はサ変・命令形であるが、この場合は、軽い仮定を示す。「それはいかにも」の「それ」は死骸を指す。ありに引かれて動かされ、食い散らかされる死骸がなぜ静かなのか。ここは実際に見つけた死骸から想起した「死のイメージ」の静かさがあるのである。引かれても、食われても死は不変・不動。永遠の静なのである。

キー・ポイント　蜂の描写に見られる「寂しさ」と「静かさ」の違い　「寂しさ」は【生きているもの】の対として【死んでいるもの】を捉えたときに生じた主観。すなわち他の事物に影響を与えられず、ただそこに存在することしかできない、外界との没交渉性に起因する心情である。一方で「静かさ」は死そのもののイメージである。「三日ほどそのままになっていた」（一九九・5）という事実から、死の不変性・不動性を時間の連続上において捉えている。永遠にあり続けるというイメージから発した穏やかな感じである。

16 その少し前　蜂の死骸を見る前。一九六・10に「読むか書くか」とあり、このことを指すととらえることもできるし、城崎温泉滞在以前ととらえることもできる、解釈に

揺れのある表記である。なお志賀直哉が「范の犯罪」を書いたのは初出の「白樺」紙上によれば大正二（一九一三）年九月二十四日のこととされており、これは城崎温泉滞在（同年十月十八日より）以前のことである。

●二〇〇ページ

2それを助長　「それ」は「嫉妬」を指す。大正時代前後では、精神／身体の二項を精神／生理と表現することも多かった。范にとって「嫉妬」は心理的、「生理的」は身体的な殺害の要因となっている。

3その静かさを書きたい　范に殺され墓の下にいる妻の死骸から想起する静かさを書きたい。蜂の死骸から「静かさに親しみを感じた」後にこのエピソードが書かれており、妻の死骸と蜂の死骸（あるいは祖父や母の死骸）が同列のものとして並べられている。一九八・7で感じていた「何かしら」の親しみが、蜂の死骸を見つけたことで、言語化したいという欲求が現れるほどに具体化されたともいえる。

●二〇一ページ

2魚串　魚を焼くときに用いる串。竹製のものと金属製のものとがある。ちなみに作者の日記には「竹クシ」とある。

7顔の表情……動作の表情　ふつう表情と言えば顔の場合に用いるが、作者はねずみの本能的な必死の動作を、生への一生懸命な願望の表れと見て、こう表現した。

8それが一生懸命であることがよく分かった。　「それ」は「どうかして助かろうとしている」（二〇一・7）ねずみの動作を指す。

12頓狂な顔　慌てた、どこか間の抜けた顔。同じ石に対して、あひるが頓狂な様子を見せれば見せるほど、ねずみの必死さが克明に浮かび上がる。また、あひるが「せわしく足を動かして」（二〇一・13）いることから、あひると「忙しくその脇をはい回る」（一九九・2）蜂とを接続して、生のイメージを意味づけることもできる。

15寂しい嫌な気持ちになった。　次の二行にある「恐ろしい」という感じから発した心情である。完全な死に至るまではなんとか生きようともがく生き物の姿、死に至る推移（動騒）に対する「自分」の本能的な拒否反応を意識したものである。

15あれが本当なのだと思った。　「あれ」は14～15行目の「ねずみが……逃げ回っている様子」を指す。

●二〇二ページ

4それに近い自分　ねずみと同じように死から逃れるために努力した自分。

7～9半分意識を失った……自分の問題だった。　「いちばん大切なこと」とは自分のけがの手当、自分の命を指す。また「しかも」（並列・添加の接続詞）は前文の「半分意識を失った状態で……よく頭の働いたこと」の不思議さと、自分の問題であるにもかかわらず、そのようにしたことの不思議さとを並列・添加する働きをしている。他人のけがの場合なら冷静に判断をし、援助の努力ができるのも当然だろう。しかし、自分に直接降りかかったけがに対して、しかも半分意識を失った状態で、冷静に判断できたことが不思議に思われたのである。

●二〇三ページ

2それが今来たら　「それ」は「ねずみの場合」（二〇三・1）、つまり致命傷で死の宣告を受けたことを指す。「ねずみのようなことが起こった」（二〇二・3）ら、つまり自分のけがが「フェータルなものだともし聞いた」（二〇三・13）ら、という意味。

2なおかつ、あまり変わらない自分であろう　「なおかつ」（副詞）はそれでもやはりとい

う意味。「であろう」は「どうだったろう」（二〇二・14）「襲われなかったろう」（二〇二・15）などから、「だろう」（推量）と同じ意味と考えられる。「ねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない」（二〇三・1）の対応関係に鑑みて、【あまり「ねずみの場合」と変わらない自分だろう】という意味に取りたい。

3「あるがまま」で　「　」は強調。本文の文脈上、この「あるがまま」（言葉の意味は「そのまま」、「存在するとおりに」）は「自分は助かろうと思い、何かしら努力をしたろう」（二〇二・16）、つまりねずみと同様の動騒を起こすという意味に取りたい。

3気分で願うところ　死ぬなら、ねずみのような動騒は起こしたくない、静かに死にたいと願う心情。ここでの「気分」は「実際」の相対語として用いられている。

3実際にすぐは影響はしない　「実際」は死に直面したときの自分の実際の状態で、この場合は名詞。前項を受けて静かに死にたいと気分的に願っても、それが現実の実際の場面においてもすぐに影響し、自分の願ったとおりになるというわけではないという意味。

4両方が本当で　「両方」とは「気分で願うところ」と、「実際」の二つをいう。「気分で願うところ」は、自分の生命に関する事態に即して、こうありたい、こうあるだろうという心情、「実際」は、具体的に起こす行動のこと。穏やかに静かな死を迎えたいという心情も、死を迎える前に動騒をおこすだろうという予測も、そのどちらもが嘘偽りのない真実だという意味。

4影響した場合　自分の希望が実際（現実）の場面に影響を与え、希望したとおりの実際（現実）になること。

5それはしかたのないことだ。　主人公はここまで見てきた死から、「静かさ」に関わる「両方」の矛盾を「それでいい」とした上で、そのまま「しかたのないことだ」という言葉で語り、受け止めている。

6またしばらくして　作者の日記によると、城崎温泉で「蜂の死と鼠の竹クシをさされて川へなげ込まれた話を書きかけてやめた。」とあるのが十月三十日。そして十月三十一日の項に「やもりに石を投げたら」死んでしまったことが書いてある（やもりは誤記）。城崎到着二週間後のことである。

9物が全て青白く……そわそわとさせた。　ここでの「物静かさ」は主人公を「かえって」「そわそわ」とさせており、それまで「親しみ」を感じていた「静かさ」とは質的に異なる「物静かさ」である。よってこの「物静かさ」は「死」の象徴としての「静かさ」ではなく、あくまでも実景の描写としてとらえることができる。一方で「物が全て青白く、空気の肌触りも冷え冷えとして」を、一九七・10～11の「青い冷たい堅い顔をして」墓の下に寝ている死骸の部分と対応させて、桑の木の場面をいもりの死に向けた不気味な前奏的表現と考える立場もある（→キー・ポイント　桑の木の場面について　参照）。

15原因は知れた。　「参考」欄に掲示してある通り、すでに明確に言語化されていた桑の木の葉の「原因」をあえて削除した桑の木のエピソードを挿入することで、いもりの場面に向けて、秋の夕暮れの冷え冷えとした雰囲気を作り上げることができたという作品効果を重視したい。

キー・ポイント　桑の木の場面について　桑の木の場面は従来「黄泉の世界」のイメージを読み込む立場と実景の描写として読解する立場の二通りに解釈が分かれてい

る記述であり、指導上においても扱いが難しいところである。確かに「物が全て青白く」など、「黄泉の世界」を連想させる記述は多く、また「いつまで行っても、先の角はあった」（二〇四・1）として桑の木の場面からの連続性が示唆されるいもりの死においても、多様な読みを可能とする。だが逆説的に言えば、「黄泉の世界」を前提とした読解は、「黄泉の世界でいもりを殺す」という形で読解への大きな影響をもたらし、結果として主人公の死生観を必要以上に観念的なものにしてしまう恐れがある。本教材では、「教材のねらい」にもある通り、文章の意味それ自体を読み取る練習をしたい。したがって本指導書においては桑の木の場面を実景の描写として読解し、桑の葉が動く原因を明確にしないことによる作品効果（＝いもりの場面に向けた雰囲気を持続させる効果）を重視している。

●二〇四ページ

5 自分は先ほどいもりは……しかしもうそんなことを考えなくなっていた。　直接生・死に関連しない文章であるが、後の展開の偶然性への伏線ととらえることもできる。心底嫌いだったり、逆に好きだったりしたら、石を投げて驚かせてやろうとする気も起きないはずである。

14 石はコツといってから流れに落ちた。……もう動かない。いもりは死んでしまった。　死骸を見つけた「蜂」、死への動騒まっただ中の「ねずみ」の段落には見られない、生から死への瞬間の描写である。いもりを襲った突然の死を、短文や「た」止めを駆使してたたみかけるように表現している。極めて印象的な感銘を読み手に与える迫力も味わわせたい。

●二〇五ページ

7 いもりの身に自分がなってその心持ちを感じた。　いもりの描写から、その死が全くの偶然であったことが知れる。「自分に妙な嫌な気をさした。」（二〇五・5）のは罪悪感からでなく（「虫を殺すことをよくする」（二〇五・4）とある）、「偶然性」によるものである。すなわち、いもりも自分も、その生命を「偶然性」に支配されている「生き物」であるということの実感が「妙な嫌な気」を起こさせ、「生き物の寂しさ」（二〇五・8）という気分として定着したのである。そしてこの実感は、いもりのそれと全く同じであるという意識から「いもりの身に自分がなって」という気持ちも生じさせたのである。

8 生き物の寂しさをいっしょに感じた。　いもりや蜂、ねずみ、また人間でもなく「生き物」としている点に注意したい。主人公は「死ななかった」ことに感謝すべきであると思うものの、一方では「死」と「生」にはそれほどの差はないという感慨に思い至っていくのである。「偶然」によってその生命を支配されるのは「生き物」全ての寂しい運命であるという感慨である。

14 しかし実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。　偶然にも生き残ることができたという喜びよりも、偶然に支配される生き物の寂しさのほうが「自分」をより強くとらえていたからである。文脈から理由を指摘させるならば、すぐ後の「生きていることと……両極ではなかった。それほど……気がした。」がこれにあたる。前行「気もした」とあわせてロード・クライブで読んだ使命感に実感が伴わなかったこととの対応を見ることもできる。

15 生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　「両極」は遠く離れた正反対のものという意味。「偶

然が生き物の生死を支配する」と実感した以上、生と死の境界は極めて不確実で、従来自分が考えていたような相互反極関係（正反対、両極端）ではないということ。

キー・ポイント　生きていることと死んでしまっていることと、それは両極ではなかった。　死に隣接した事故の体験をもとにして、生き物の生と死について観照してみると、それまで両極と思っていたものが、さほど差のないものだという心境になった。生と死とは偶然の律に支配されていて、ひょっとした拍子で生は死へと暗転する。それは例えば「どうしたのかしら」（二〇四・16）と思うほどに損傷のないまま死んだいもりの死骸や、二〇五での蜂やねずみの死骸のイメージ（ありや魚などに食べられず、損傷のないまま静かにあり続けるイメージ）に共通する、存在の連続性とあわせ考えれば、主人公にとって死はこの世との永の別れではなく、単に存在形式が変化したに過ぎない一形態であるともいえよう。生と死についての新たな視野を獲得したのである。

16 視覚は遠い灯を……ただ頭だけが勝手に働く。　「足の踏む感覚も」（二〇六・1）と並列の助詞で並べていることから、視覚、触覚とも不確かなのだといえる。すなわち、遠い町の灯をはっきりそれと意識しているわけではなく、また足下を確認するわけでもない。更に頭も、身体的、感覚的条件に結びついていない状態で、知覚がただ勝手に働いているのである。言いかえれば、主人公は必然性があって生きているのだという実感が消失し、不確かな身体性と相まって、偶然生きているのだという考えだけが勝手に進んでいる状態だといえる。結果的に城崎温泉の滞在を三週間で我慢しきれなくなった主人公の衝撃の大きさを感じ取るようにしたい。

●二〇六ページ

3 自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。　「助かった」ことが「脊椎カリエスになる」ことだけに限定されていることに注意したい。逆に言えば、他のことは継続中であって、全てのことが助かったわけではなかった。

注意する語句

（＊で用例を示した）

ふち…水を深くたたえた所。
＊魚はふちに深く沈んでしまった。

調える…望ましい状態に戻す。ととのえる。
＊食事の支度を調える。

相違ない…間違いない。確実である。
＊あの宝石は盗まれたのに相違ない。

肌触り…肌に接したとき受ける感じ。
＊肌触りを確かめる。

物静か…ひっそりとして静かなさま。
＊物静かな街を歩く。

何気なく…明確な目的や意図なく物事を行うさま。また、そのように見えるさま。さりげなく。
＊隣の席の彼女に何気なく話しかける。

肘を張る…肘を張り出していかにも強そうに装う。肘張る。
＊精一杯の虚勢を示すために彼は肘を張った。

鑑賞

1　「城の崎にて」評価史

・評価史がまとまっている論文

「城の崎にて」がいかに評価されてきたかを概略する際に必ずと言っていいほど参照される論文として、亀井千秋「志賀直哉『城の崎にて』試論―〈私小説〉〈心境小説〉神話の実態について―」（『近代文学試論』40号、平成十四年一二月）が挙げられる。この論は「城の崎にて」が「昭和二十五年頃から教科書へと採用されることで、文学作品として研究されるだけでなく、教材として多数の学生に読まれるようになった」と指摘した上で、「城の崎にて」の評価史を昭和二十五（一九五〇）年を境に二つに分け、分析している。令和三（二〇二一）年八月現在では、広島大学学術情報リポジトリにてインターネット上に公開されている論文なので、手軽に読むことができる。また亀井氏論以降の評価史をまとめた物としては、評価史をまとめることを主眼とした論文ではないが、山田伸代「志賀直哉の『城の崎にて』を読む―静かなる生と死―」（『日本文学』66号、平成二十九年八月）や、柳澤広識「志賀直哉『城の崎にて』論―「原因」の変化、「偶然」の感知―」（『解釈』64号、平成三十年一月）が挙げられる。山田氏の論文は本文中において、柳澤氏の論文は注釈において、それぞれ細かく先行研究を参照しながら論を展開しており、両者を読み比べることで評価史を相対的に把握しやすい。

・冒頭の対応関係について

「二、三年で出なければ後は心配いらない」―「もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった」や、「三週間以上―我慢できたら五週間くらいいたい」―「三週間にて、自分はここを去った」という対応関係は古くから研究の論点となっていた。この対応関係に関しては様々な説が出ているが、極めて大雑把にまとめれば「①志賀直哉の実生活を根拠に、孤独感・ノイローゼ気味な心境の変遷を読み込むもの」、「②テクストを根拠に、『死に向き合う』『生を回復する』『死も生も超克した』『結局死生観は変化していない』など、死生観を軸に「城の崎にて」全体の語られ方を読み込むもの」の二種類に大別できる。

特に近年多く見られる研究の傾向として、②の一分類として、「城の崎にて」の語り手や語りの構造について論じていく研究がある。その流れの源流としてあげられるものが、田中実「近代小説の一極北―志賀直哉『城の崎にて』の深層批評」（『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑰―』、教育出版、平成二十四年三月）である。田中氏の論は「第三項理論」とも言われる理論に基づいた分析で、先に挙げた山田氏もこの論に乗った分析をしている。この田中―山田両氏の流れに対して、例えば井上明芳「教材としての志賀直哉「城の崎にて」の構造分析」―生を回復する語り―」（『國學院大學教育学研究室紀要』50号、平成二十八年二月）、といった別の語りの構造を論じるものも発表されている。

2　「寂しさ」と「静かさ」との使い分け

すでに語句の研究のキー・ポイントにおいても記したことだが、改めて本文全体を俯瞰しての「寂しさ」と「静かさ」の使い分けについて考えておきたい。「城の崎にて」の緻密な構造を用語面で特徴づけているのは「寂しさ」と「静かさ」である。この作品で

「寂しさ」「静かさ」が用いられているのは全部で二〇例。うち「寂しさ」が八例、「静かさ」一二例である。これらの用法及び配された位置には顕著な特徴が見られる。すなわち「寂しさ」と「静かさ」とが錯綜している場合、「寂しさ」、「静かさ」が単独で用いられている場合である。また「静かさ」が頻出するのは死んだ蜂の描写部分であり、ねずみやいもりの描写部分には全くそれがない。また、いもりの描写では、「寂しさ」がキーワードのようにして使われている。

　これらのことから、この作品における「寂しさ」とは、具体的、現実的な生と対照されるときに使われる言葉であり、「静かさ」とは、死そのもの、つまり生の動騒が終わった永続性、普遍性に対して使われる言葉であるといえる。また、両者が錯綜している場面は、生死の間における「自分」の精神の揺れを表していると考えることができよう。死ぬことは「寂しさ」と「静かさ」の両方が見て取れ、主人公は「寂しさ」のない「静かさ」にだけ「親しみ」を覚えているのだ。

3　文体の特色について

・短いセンテンスが多く、それが長いセンテンスと見事に調和している。また一般的に短いセンテンスを連続させると、きびきびしてはいても軽い感じのリズムになるが、この作品の場合、描写の目の鋭さ、表現（用語・用法）の的確さが重量感を与えている。

・「た」止めが多い。生きている蜂の活動の描写、必死に逃げ回るねずみの動騒の場面は、文末に変化を持たせ、その動きを活写している。蜂の死の場面、いもりの死の場面は心情をも含めて、短文「た」止めが用いられ、一つ一つの事柄、心象を印象強く読者に植えつける効果を示している。また、「た」は単なる過去の助動詞としての機能だけではなく、【詠嘆】の機能を発揮している部分がある（蜂の死の場面）。

・「いかにも」の繰り返し（蜂の死の場面）は生きて活動している蜂に対照させて、死んでいる蜂の姿の不変性・不動性を実感的に強く印象づけて効果的である。

参考

・「小さい清い流れ」について

環境省水・大気環境局や国土交通省水管理・国土保全局が編集した「川の生きものを調べよう―水生生物による水質判定―」という小冊子がある。その４・５ページに「やまめ」が住む川の環境がイラストで紹介されており、「小さい清い流れ」のイメージがつかみやすいので紹介しておく。

https://www.mlit.go.jp/river/shishin_guideline/suisituhantei/text.pdf

以下、「城の崎にて」以外の筆者によるテクストから本文理解に有益と思われる部分を補足しておく。

１　山の手線に跳ね飛ばされた事故について

「創作余談」には次のようにある。

「余談になるが、この小説（注「出来事」を指す）を書き上げ、その晩里見弴と芝浦へ涼みに行き、素人相撲を見て帰途、鉄道線路の側を歩いていて、どうした事か私は省線電車に後からはね飛ばされ、甚い怪我をした。東京病院に暫く入院し、危い所を助かった。電車で助かる事を書き上げた日に自分も電車で怪我をし、しかも幸に一生を得た。この偶然を面白く感じた。この怪我の後の気持を書いたのが「城の崎にて」である。それからこの時の経験は「或る男、其姉の死」の中に書き入れてある。」

事故当日の志賀直哉の日記（大正二年八月十五日の記事）においても「創作余談」と同様の事故前後の経緯が書かれている。「城の崎にて」の草稿「いのち」によれば、怪我そのものは背を打ち、頭を石にぶつけて六分ほど切ったようであるが、傷の程度は志賀直哉が「甚い」「一生を得た」と書くほどの重傷ではなく、入院後約二週間しての八月二十七日に退院できたようである。

仮に「城の崎にて」を志賀直哉の実生活と照らし合わせる立場を取るならば、P二〇二・12で登場する「友」は里見弴を指すと考えられる。

２　蜂の死・ねずみ・いもりのことについて

「城の崎にて」で「自分」の心情の変化を捉える契機となる「蜂」「ねずみ」「いもり」だが、志賀直哉の日記を読む限りでは「蜂」「ねずみ」に関しては実際に志賀の目の前で起きた話かどうかは断定しづらい（大正二年十月三十日の記事）。その反対に「いもり」は実際に石を投げたらぶつけて死んでしまったという内容の記述を見て取ることができる（大正二年十月三十一日の記事）。「城の崎にて」本文中においても、「蜂」「ねずみ」の死骸は直視していないのに対して「いもり」の死骸は直視している。学術的な、あるいは生産的な読解かどうかという評価をさておけば、この死骸を直視した／していないという違いの原因を志賀直哉の直接の体験か否かという点に着地させることも可能かもしれない。

３　桑の木の葉が動く原因について

「続々創作余談」によると次のようにある。

「実は風は微かに吹いていたのだが、人体には感じられない程

度の風で、葉はそれで動いていたのだ。そして何故その葉だけが一枚動くかというと、葉柄が真直ぐに風の来る方に向っていて、最初何かで、葉がちょっと動くとあとは振子のように微かな風に吹かれつつ運動が止まらなくなったのである。それが人体にも感じられる風が吹いて来て、かえって運動が止ったという場合で、こういう事は、私は何回か経験しているので、大概分るだろうと思って書いたが、そのため、よく質問を受ける。」。

生徒にとっても理解しづらい場所であると思われる「桑の木の葉」の記述だが、右の引用文を紹介しながら「『城の崎にて』発表当時も質問が多かった場所」「志賀直哉自身は「大概分るだらうと思つて書いた」とあるように、桑の木の葉の動きに関しては特に深い意味を込めて描いたわけではないようだ」などと軽く触れる程度に済ませることも実際の授業上での工夫として考えられる。本指導書の「キー・ポイント桑の木の場面について」でも触れたとおり、本教材では文章の意味それ自体を読み取ることに重点をおいた指導を心がけたい。

なお余談ではあるが、草稿「いのち」では、「風の来る方」だけでなく、桑の木の葉の軸が弱くなっていたことも桑の木の葉が動く原因として挙げている。「城の崎にて」本文にはない記述なので「語句の研究」では書かなかったが、桑の木の葉の軸（つまり葉柄）が枝から外れかけていたことをあわせ考えると、この一連の記述も理解しやすくなるかもしれない。

4　作品全体について

「創作余談」に作者自身が次のように書いている。

『城の崎にて』これも事実ありのままの小説である。鼠の死、蜂の死、いもりの死、皆その時数日間に実際目撃した事だった。そしてそれらから受けた感じは素直にかつ正直に書けたつもりである。いわゆる心境小説というものでも余裕から生れた心境ではなかった。」

※心境小説とは

心境小説とは周辺と調和して生きる自己の心境を語る小説のことで、私小説のような戦いと敗北を描かずに、外面的には静かな心境を描いた作品。一般的には「城の崎にて」や「濠端の住まひ」などがあげられる。一方、私小説は作家の実体験に基づき自己の偽らざる姿をリアルに描いた小説。二つとも題材が作家の身辺に限定され、短歌・俳句と共通する点もある日本独特の文学である。志賀直哉のほか太宰治・滝井孝作・尾崎一雄・葛西善蔵などが代表的な作家としてあげられる。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　死んだ蜂について、「地面へ流し出されたことであろう」（一九九・11）「どこかでじっとしていることだろう」（一九九・12）「死骸はそこにじっとしているだろう」（一九九・13）と推量で語られていることと、ねずみの死の場合の描写を対比し、両者への筆者の向き合い方の特徴を考えてみよう。

【答】　問いに挙げたように、蜂については死ぬ瞬間も見ておらず、死んだ後のことも推測でしか語られていない。それに対して、ねずみの死は、「逃げようとする」（二〇一・2）、「はい上がろうとする」（二〇一・3）、「前足をかけた。…つかえた。…水へ落ちる。…助かろうとしている」（二〇一・6）というように、現在目前に起ころうとしている。蜂の死が自分の想像の範囲であることが、死への親しみをもたらしているが、実際に目にする死は、圧倒的な衝撃を与え、「想像できない」（二〇二・14）の直後に「…だったに相違ない」（二〇三・1）と述べるように、筆者の考えの道筋を混乱させている（「学習のポイント」4も参照）。

▼ポイント▲　「死」という概念については、抽象的・想像的に思考することで得られるものと、実体的に思考することで得られるものでは、位相が異なる。筆者の考えもその両者を含んでいることを、表現から理解する。

2　動物の死をめぐる三つの出来事に対し、筆者はそれぞれ死がどのようなものだと感じているか、本文に即してまとめてみよう。

【答】

①蜂の場合
「いかにも静かな感じを与えた」（一九九・6）
「寂しかった。しかし、それはいかにも静かだった」（一九九・7）
「いかにも静かであった」（一九九・14）
「その静かさに親しみを感じた」（一九九・15）

②ねずみの場合
「ねずみが殺されまいと、…自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った」（二〇一・14）
「ああいう動騒は恐ろしいと思った」（二〇二・1）

③いもりの場合
「いもりにとっては全く不意な死であった」（二〇五・6）
「かわいそうに思うと同時に、生き物の寂しさをいっしょに感じた。」（二〇五・8）

蜂の死を見て、死を静かで近しいものとさえ感じたが、ねずみの死では、状況や感情がいかなるものであっても、生きようと努力し続けるのが生き物の本質だと感じた。いもりの死では、死が偶然に左右されるものだと感じた。

▼ポイント▲　偶然に出会った出来事を描いているようでありながら、死についての異なる体験が選ばれ、思考が深まっていく巧妙さを理解する。

3　「眺めていた」（一九八・15）「見つけた」（一九八・16）「見えなくなった」（二〇三・8）など、視覚に関する表現を抜き出してみよう。また、聴覚や触覚など、ほかの感覚に関する表現はどの程度あるかを確認し、筆者が世界を捉える方法の特徴を考えてみよう。

【答】
「見ること」（一九九・7）
「見えた」（二〇三・13）
「見ていた」（二〇四・5）
「見えた」（二〇四・15）　他多数。

視覚は多く表明され、その対象についても多く描写されているが、他の感覚については、例えば聴覚について、擬音語は若干あるが、「聞こえた」というような表現は極端に少ない。触覚についてもほぼないに等しい。筆者が観察したものを描写するところに特色があると考えられる。

▼ポイント▲　世界を感知または描写する他の方法も考えてみながら、志賀直哉の表現の特色を把握する。

4　「いつか」（一九七・16）「何かしら」（一九八・7）「こういう場合」（二〇三・15）など、内容が詳しく説明されない表現を抜き出してみよう。また、「想像できない」（二〇二・14）の直後に「…だったに相違ない」（二〇三・1）と述べるなど、行為や判断の方向が揺れる表現も抜き出し、なぜ、このような表現になるのか、考えてみよう。

【答】
①内容が詳しく説明されない表現
「何かが」（一九八・3）
「どこかで」（一九九・12）
「様子が妙に頭についた」（二〇一・15）
「何となく」（二〇三・10）
②行為や判断の方向が揺れる表現
「そんな気もした。しかし妙に…」（一九八・6）
「自分はそれに対し、…湧き上がってはこなかった」（二〇五・15）

主人公は、「死」というまだ経験したことのないものについて考えている。①は、自分でも理解や説明ができないための表現だと言える。また、想像できることは、自分の知っている範囲内にとどまるので、次々あらわれる新たなできごとや考えによって、その想像が「死」を言い当てていないことに何回でも気づかされてしまう。②は、そのような、知ることができないということ自体を表現しようとするための表現である。

▼ポイント▲　本文は、必ずしも主人公の考えが読者に率直に伝わる文章ではない。そのように書かざるを得ないのはなぜかを考え、文学的な文章が何を追求しているかを考える。

言葉と表現の解答例

1　本文中から擬音語や擬態語を抜き出し、その効果について考えてみよう。

【答】

①擬音語

1　「細長い羽を両方へしっかりと張ってぶーんと飛び立つ。」（一九八・13）

＊蜂の羽音を表す擬音語であるが、まっすぐに飛んでいく様子も表していると考えられる。

2　「カチッカチッと石垣に当たって跳ね返った。」（二〇一・4）

3　「スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。」（二〇一・11）

4　「石はコツといってから流れに落ちた。」（二〇四・14）

②擬態語

1　「川がにが石のようにじっとしている」（一九七・3）

「どこかでじっとしていることだろう。」（一九九・12）

「そこにじっとしているだろう。」（一九九・13）

「傾斜から流れへ臨んで、じっとしていた。」（二〇四・4）

2　「足を腹の下にぴったりとつけ」（一九八・16）

3　「首を伸ばしてきょろきょろとした。」（二〇一・8）

4　「何となく自分をそわそわとさせた。」（二〇三・10）

5　「ある一つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。」（二〇三・11）

「いつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。」（二〇三・12）

いずれも、特に独自性があるというよりは、一般的、シンプルなものを的確に用いている。これは、読者による状況の再現を容易にする。また、言葉の工夫に読者の目を向けさせるというよりは、表されたできごとそのものに注目させる。

2　「今自分にあのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。…それへ行く方法を指定した。」（二〇二・3～6）という部分を読んで、筆者が自身を指すのに使う「自分」の特徴を考えてみよう。

【答】　「自分」はどうするか、自分をある状況において実験的に観察している、あるいは、「自分」はどうしたか、過去を冷静に評価している。「自分はしかし急に元気づいた」（二〇二・13）や「自分は非常に快活になった」（二〇二・13）、「自分はどうだったろう」（二〇二・14）、「その自分はちょっと想像できない。…相違ない」（二〇二・14～二〇三・4）も同様である。

特に「寂しかった」のような直接的な感情の表現と比較したりしながら、「自分」とは、自身を対象化し、突き放した表現であることを考えたい。

▼ポイント▲　小動物に向けられる観察眼が、自分自身にも向けられている。小動物にはなく、人間にはある意識をも、可能な限り観察しようとしていることを把握する。

言語活動の解答例

1　自分の見たものや感じたことを効果的に表現するために、どのような構成上の工夫をしているか話し合ってみよう。

【答】　「自分の見たもの」は蜂・ねずみ・いもりに限らず、城崎温泉の秋の情景ややまめ、川がに、あひる、桑の木などの動植物まで、実に多岐にわたっている。それら全てに「感じたこと」を意味づけることも不可能ではない（例えばあひるは「せわしく足を動かして」おり、その点で「忙しくその脇をはい回る」蜂と接続することができる）。だがそのような細かな象徴性ではなく、直接「見た物から感じたこと」という構成になっているのは蜂・ねずみ・いもりの三つだけである。この三つから感じた「死」に関しての考えが、重複することなく並べられている。この点に「構成上の工夫」が見て取れる。

また「何かが」（P一九八・3）「そんな気もした。しかし妙に」（P一九八・6）といった、直接感じた内容を説明するのでなく、読者に自然と「何を感じたのか」と疑問を抱かせる表現や、「ぶーんと飛び立つ」（P一九八・13）といった平易なオノマトペといった、すんなりと作品世界を想像できるような表現も見て取れる。「見たものや感じたこと」を表現するのにあたり、これらの平易な表現を使うことで、読者をひきいれるという「効果」をここに見て取れる。

このように、この問題は【①「自分の見たもの」「感じたこと」は何か】【②「構成上の工夫」は何か】【③「効果」は何か】という三つの問いに分解して解くことが可能である。仮にこの問題でアクティブ・ラーニング形式の授業を実施するならば、①でＫＪ法を行いつつ、その結果を②や③と合わせたジグソー法の活用が考えられる。

▼ポイント▲　この作品では、起こったことがそのまま並べられているように見えるものの、「学習のポイント」2からは、「死」についての三つの考え方が、重複することなく、深まるように並べられていること、つまり構成的意図が明確であることがわかる。一方、「学習のポイント」4と、「言葉と表現」1からは、あたかも上手な文章を書こうとする意識を放棄しているような、逆の性質も見受けられる。後者によって、前者の人為的構成が意識されることなく、自然に読まれる文章になっていると言える。

（秋山　桂）